

鏡物の世界
— 『唐鏡』を中心に—
(要約)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号：D140990

氏名：李 莘梓

先行研究に於ける『唐鏡』本文の研究は、ほとんど出典研究である。実際のところ、藤原茂範がどのような書物を材料に『唐鏡』を編成したかは不明である。たとえ『唐鏡』の記事が他の書物にあるとしても、これはこの書物から引用されたという判断を下すのは困難である。

また、ブライトウェル氏の研究において、鏡物は一つの文学ジャンルに分ける必要があると指摘したが、鏡物とは一体どのような文学作品であろうか。何故書名に「鏡」がつけられたかは不明である。

さらに、『唐鏡』の成立年代については、茂範の鎌倉滞在期・茂範の出家後という二つの説に分けられたが、どれが正確かは検討する必要がある。特に、『唐鏡要文』が発見されたことを踏まえると、以前の『唐鏡』の成立論はもう一度考察する必要があると考えられる。

本論文では、鏡物を一つの文学ジャンルとして分析し、鏡物の世界を考察する。「鏡物の世界」とは、鏡物における「鏡」の意味・語りの方法・内容の構造・反映した世界観などの鏡物の特徴に関わるものを指している。本論文は『唐鏡』の世界を中心にし、四鏡の世界をも検討する。この研究を通じて、『唐鏡』、及び鏡物の意味・価値を考察したい。

以下、各章の目的を挙げる。

第一章では、『大鏡』・『今鏡』・『水鏡』・『増鏡』、いわゆる四鏡を考察する。

第一節では、①『大鏡』の語りの中の意味・②語り手の立場・③紀伝体の歴史叙述の形式・④小一条院東宮辞退事件を考察し、最初の鏡物である『大鏡』の語りの特徴・歴史叙述の方法を明らかにする。

第二節では、『今鏡』と『大鏡』を比較しながら、①語り手の変化・②語りの中の変化・③語りの重点の変化を分析し、文芸を中心とする『今鏡』の特徴を考察する。

第三節では、『水鏡』の①語りの中の意味・②語りの構造・③著者の歴史叙述の意図を考察し、『扶桑略記』の抄訳と認識された『水鏡』の本当の姿を考察する。

第四節では、『増鏡』の①語りの中の意味・②『増鏡』の歴史範疇・③古今を対照する意志を考察し、南北朝時代に成立した『増鏡』の時代観を明らかにする。

第二章では、茂範の生涯と『唐鏡』成立年代を考察する。

第一節では、『唐鏡』の概説・著者などの情報を簡単に紹介する。

第二節では、『唐鏡』の著者である藤原茂範の系譜・生年、特に、日記などの史料を通じて、茂範の生涯の動向を把握する。また、茂範が制作した「茂範上啓条々」を通じて、茂範の鎌倉滞在期の生活を明らかにする。

第三節では、先行研究の論説を踏まえ、『唐鏡』の成立年代を考察する。特に注目したいのは新しく発見した『唐鏡要文』である。この『唐鏡要文』を通じて、『唐鏡』の成立過程・成立年代を分析する。

第三章では『唐鏡』を考察する。

第一節では、四鏡および『唐鏡』の書名につけられた「鏡」の意味を考察する。

第二節では、『唐鏡』の序文を考察し、語り場を大宰府安楽寺に設定する理由を分析する。

第三節では、漢武帝の部分を通じて、『唐鏡』歴史叙述の方法・方向を分析する。

第四節では、『唐鏡』に記述された中国の詩文、特に、「遊子猶行残月」の詩文を分析し、『唐鏡』に引用する漢詩文の意味を考察する。

第五節では、四鏡に記載された「唐」・『唐鏡』における日本の事情を分析し、茂範が中国の歴史物語を制作した理由を考察する。